

## 2-2 (4)

メルファラン治療歴がある多発性骨髓腫症例で自家末梢血幹細胞を採取できるか

山形 昇、栗本美和、平井理泉、松丸 睦、谷村 聡、三輪哲義

国立国際医療センター血液内科

【目的】メルファランでの治療歴は自家末梢血幹細胞採取(PBSCC)にとり不利な因子として知られている。当科でメルファランでの治療歴がある多発性骨髓腫症例で PBSCC を試みた 5 症例について報告する。【対象と方法】他院でメルファランを含む前治療歴があり、当科で PBSCC を試みた多発性骨髓腫 5 例(44 歳 - 69 歳; 男性 2 例、女性 3 例; IgG,  $\kappa$ , 3 例、IgA,  $\lambda$ , 1 例、IgD,  $\lambda$ , 1 例)。1 例は前医での約 2 年にわたるメルファランなどのアルキル化剤を含む多剤併用療法から間隔をあけずに VAD 療法を開始し PBSCC を試みた。1 例では前医での MP 療法 3 コースの 4 ヶ月後に VAD 療法を開始し PBSCC を試みた。他の 3 例では MP 療法後に高容量デカドロン(30 - 40mg/日 x 4 日)と Bisphosphonate 製剤の併用療法で 1 年以上治療した後 VAD 療法を 2 - 3 コース行い、PBSCC を行った。これら 3 例では最終の MP 療法から幹細胞動員療法までの期間は 19 - 33 ヶ月であった。採取できた CD34 陽性細胞数 /kg で採取効率を評価した。

【結果】5 例中 MP 療法から間隔をあけて幹細胞動員を行った 4 例で自家末梢血幹細胞移植に十分な CD34 陽性細胞を採取できた。【結論】メルファランによる治療歴がある症例でも 5 例中 4 例で移植に十分な末梢血幹細胞を採取できた。メルファラン治療から幹細胞採取まで間隔をあけることができれば移植に十分な幹細胞を採取できる可能性が示唆された。